

「推量確認要求」用法の日中対照研究

情報伝達・語用論的な観点から

張 恵芳

要 旨

対訳において、「推量確認要求」用法を持っている日本語の表現形式「だろう」・「のではないか」・「ね」と中国語の表現形式“吧”・“是不是”との間に、(3×2) 六つの対応関係が見られる。本稿では、表現形式と推量系副詞 (中国語の“语气副词”) との共起関係・文の意味的階層構造 (命題・判断・伝達) における各モダリティ形式の位置づけ・表現形式の語用論的制限といった三つの点から考察し、「推量確認要求」用法の日中両語の仕組みが違くと主張する——日本語は聞き手への伝達を中心とする「聞き手中心型」で、確認する内容や確認の相手によって表現形式を使い分ける; 中国語は話し手の推測を中心とする「話し手中心型」で、基本的に確認の内容や相手によって表現形式を変えない。そして、仕組みの違いが多様な対応関係を生み出す原因だと考える。

キーワード

推量確認要求 表現形式 推量系副詞 意味的階層構造 語用論的制限

1 はじめに

対話において、聞き手の情報知識・同意や共感・認知状態を確認する表現は、どの言語にも存在すると考えられる。その中で、聞き手が確かな情報を有していると話し手が見込み、推量判断を加えつつ聞き手に持ちかけることによって、情報の確定化を図るタイプがある。そういう用法を「推量確認要求」用法¹と呼ぶ。

具体的な表現形式として、日本語には、「だろう」・「のではないか」²・「ね」³があり (三宅 1996、宮崎 2005)、中国語には、“吧”と“是不是”⁴ (曹 2000、呉 2002、張 2006) があ

¹ ここでは、定義だけを提示する。「推量確認要求」用法の考察範囲及び「確認要求」における位置づけなどの詳しい検討は、張 (2008) を参照。

² 文体や発話の場などにより、「だろう」は「でしょう」・「でしょ」・「～たろう」などの形式を取り、「のではないか」は「のではありませんか」・「んじゃないか」などの変異形を使うこともある。論述の便宜上、「だろう」と「のではないか」で一括する。なお、「のではないか」と「ではないか」の分類基準は田野村 (1988) に従う。

³ 文末形式を大雑把に「スル形-非スル形」という対立関係で捉え、それぞれ、「確言形」・「概言形」と呼ぶ。「君、昨夜、徹夜したね/だろうね?」のように両方使えることから、「確言形+ね」と「概言形+ね」両方が「推量確認要求」用法を持つことがわかる。詳しくは張 (2008) を参照。

⁴ “是不是”の後ろに“体词 (体言)”が来る場合、“是不是”を判断動詞“是”からなる反復疑問形式と見做すのが普通であるが、“谓词 (述詞)”が後接する場合と同じく、肯定の傾きを表す用法もある (邵・

る。

- (1) これ、君のペン {でしょう / ではありませんか / ですね} ?
 (1) 这是你的笔吧? / 这是不是你的笔?
 (2) 随分待った {だろう / んじゃない / ね} ?
 (2) 等了很久吧? / 是不是等了很久?

従来の対照研究では、「だろう」と“吧”(曹 2000、呉 2002 など)、「のではないか」と“是不是”(張 2006) といった一対一の考察がなされてきた。しかし、対訳コーパス⁵で確かめた結果、図 1 のように六つの対応関係が見られた。

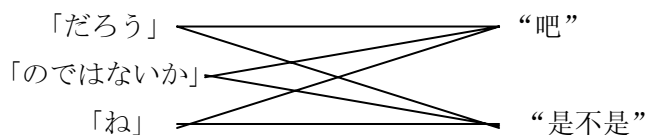


図 1 六つの対応関係

例えば、次のような対訳がある⁶。

- (3a) 「店は別に、前と変わっていないだろう」 / “店同以前没大变化吧?”
 『あした来る人』⁷
 (3b) “你大概最关心的是溪流会不会放过你吧?” / 「君が今いちばん気にしているのは、
 溪流が許してくれるかどうかだろう?’
 《人啊、人》
 (4a) 「お忙しいんじゃない?’ / “很忙吧?”
 『女社長に乾杯』
 (4b) “(你奶奶)后来一定挨了错误路线的棒子吧?” / 「(あんたのおばあさんは)その後、
 きっと誤った路線にやられたんじゃない?’
 《钟鼓楼》
 (5a) 「先生、まさか石見へ帰りつきりになさるんじゃないやございませんでしょうね」 / “医
 生、您回到石见之后不会再不来吧?”
 『黒い雨』
 (5b) “你一定全然不晓得我的消息吧?” / 「あんたはきっと、わたしのことをぜんぜん
 知らんでしょうね?’
 《青春之歌》

朱 2005)。本稿においては、肯定への傾きという共通の意味に考察の重点を置き、区別しないことにする。なお、議論の複雑化を避けるために、“等了很久，是不是?”のような文末に来る“是不是”(付加疑問文形式として)は今回は除外する。

⁵ 対訳資料として、主に「中日対訳コーパス」(北京日本学研究中心)を用いた。

⁶ 「ね」との対応において、「ね」だけではなく、その前の「だろう」などの要素も対応の範囲に入っていると見做すべきであろう。本稿において、「だろう」などではなくて「ね」で終結する理由を探ることに研究の重点をおき、あえて「ね」だけを取り上げる。

⁷ 例文の出典について、日本語原文は『』、中国語原文は「《》」、先行研究からの引用は「()」、作例は無標記で表示する。なお、作例は全部インフォーマントの内省を通したものである。

- (6a) 「どうだ。君の中で何かが壊れたらう(筆者注：＝ただらう)。」／“怎么样？你的心里是不是有什么东西在破灭？” 『金閣寺』
- (6b) “是不是你招来的？”／「おまえが手引きしたのだらう？」 《红高粱》
- (7a) 「誰と一緒に来ていましたか？熊谷と一緒にじゃないんですか？」／“和谁在一起？是不是和熊谷？” 『痴人の愛』
- (7b) “嫂嫂，你是不是在回想从前在家的時候？”／「嫂嫂、いま家にいらしたころのことを思い出していたんじゃないありませんか？」 《家》
- (8a) 「ふむ、君から見たら、僕と云うものは随分滑稽に見えたでしょうね」／“嗯，在你看来，我这个人是不是很可笑？” 『痴人の愛』
- (8b) “你怎么不说话？这儿又没有第三个人听见。是不是你现在不喜欢我了？”他故意做出失望的样子说。／「君はどうして話をしないんだ。ここじゃあ誰もほかの人はきいていないじゃないか。君は僕が嫌いになったんだね」彼はわざと失望したような声を出す。 《家》

また、日中両語において、イントネーションという韻律特徴の違いが見られる。つまり、日本語の文は上昇調で、中国語の文は上昇調・下降調いずれとも可能である⁸。

本稿は、表現形式と推量系副詞(中国語の“语气副词”)との共起関係・意味的階層構造における各モダリティ形式の位置づけ・表現形式の語用論的制限といった三つの点から考察し、「推量確認要求」用法の日中両語の仕組みが違っていると主張する。そして、仕組みの違いが多様な対応関係を生み出した原因だと考える。

2 表現形式と推量系副詞との共起関係

例文(3)～(8)のb(中国語→日本語の場合)⁹におけるモダリティ形式を抽出して並べると、次のようになる。

- | | | |
|--------------|---|---------------|
| (3b) “大概……吧” | → | 「だらう」 |
| (4b) “一定……吧” | → | 「きっと……のではないか」 |
| (5b) “一定……吧” | → | 「きっと……だらうね」 |
| (6b) “是不是” | → | 「だらう」 |

⁸ 「だらう」文は「ダロウの部分で上昇するか、特に急な下降をして、自然下降とは区別される」(森山 1992: 74)；「ね」文は「基本的に上昇イントネーションをとる」(日本語記述文法研究会 2003: 258)；「のではないか」も基本的に上昇調をとる(インフォーマントの内省による)。森山(1999)では、「上昇のイントネーションが聞き手の反応を伺うという基本的な意味を持つ」(p.76)と述べている。その結論から考えても、各表現形式の用いられる「推量確認要求」用法の文は聞き手の反応を伺う文で、皆上昇調を持つということもほぼ間違いないだろう。中国語の“吧”文に関しては木村・森山(1992: 39)、李(1997: 99)を参照。“是不是”文のイントネーションの認定は、インフォーマントの内省による。なお、地方によっては、上昇調を使わないところもある(陸 1984)。上昇調は「∧」、下降調は「∨」で示す。

⁹ b系列を選んだのは、bのほうがより多くのモダリティ形式が使われているからである。

- (7b) “是不是” → 「のではないか」
 (8b) “是不是” → 「ね」

五つある表現形式の中に、“吧”・「のではないか」・「ね」は推量系副詞と共起できる。

中国語の“吧”は“也许”(「たぶん」)・“大概”(「おそらく」)など確信度の低い副詞とも“肯定”(「きっと」)・“一定”(「必ず」)など確信度の高い副詞とも共起できる。日本語の「のではないか」に関しても、同じことが言える。「ね」文における推量系副詞は「ね」と共起しているというよりも、「ね」の内側に出現する推量・推測用法¹⁰の「だろう」や「のではないか」と共起しているのである。

それに対して、“是不是”と「だろう」は推量系副詞と共起しない。

“是不是”と推量系副詞の非共起は、“是不是”の文中における位置によると考えられる。すなわち、“是不是”は推量系副詞の生起するところに位置し、肯定への推測を表すという意味が推量系副詞と重なってしまうのである。中国語においては、同じ位置で同じ意味を表す形式の重なりは不自然となる。以下の例(10)は不自然で、例(11)は話し手の推測を表す文で、例(9)と同じ意味を表すには、“是不是”を文末に移動する必要がある。いわゆる例(12)のような付加疑問文の形になる。

- (9) “晓燕，你是不是听了什么人的挑拨了？” / 「晓燕、あなただれかに、そそのかされてるんじゃないの？」
 《青春之歌》
 (10) * “晓燕，你大概是不是听了什么人的挑拨了？”
 (11) “晓燕，你大概听了什么人的挑拨了。”
 (12) “晓燕，你大概听了什么人的挑拨了，是不是？”

一方、「だろう」と推量系副詞は位置による衝突がないので、その非共起に関しては別の理由付けが求められる。それについては、3節で論じる。

- (13) ??「あなたはおそらく看護婦さんだろう？」「いいえ、父なら病院で仕事しているんですけど」¹¹
 (呉 2002: 74)

3 文の意味的階層構造における各モダリティ形式の位置づけ

日本語の文の階層性は数多くの文献で論じられている(仁田 1991、益岡 1991 など)。こ

¹⁰ 日本語において「だろう」は「推量」、「のではないか」は「推測」とされているが、中国語においては“推測”という用語が用いられる。ここでは、用語の区別には深入りしないことにする。

¹¹ 「だろう」と「推量系副詞」との非共起に関する指摘と例文は呉(2002)によるものであるが、インフォーマントの内省ではゆれが出てくるのも事実である。しかし、先行研究の指摘と(3b)の訳文での「推量系副詞」の不使用から考えれば、「だろう」と「推量系副詞」が馴染めないのが事実であろう。なお、「だろう」と推量系副詞との共起問題については、張(2004)では計量的な研究をしている。

ここで安達 (1999: 194) の図を引用する。対話においては、意味的階層構造は情報伝達の階層構造でもある。



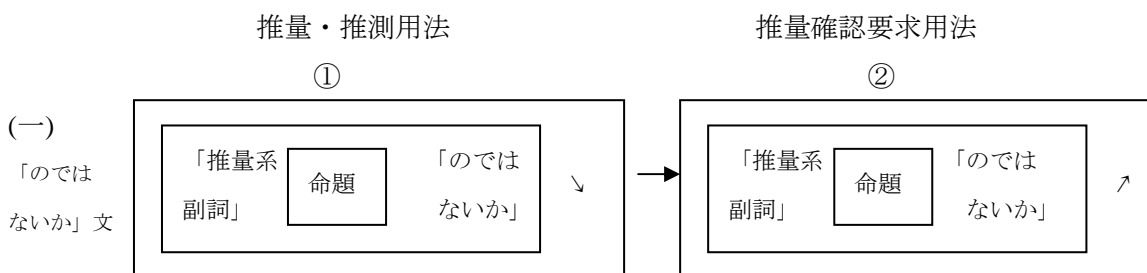
図2 文の意味的階層構造 (安達 1999: 194)

「確認要求」用法を考察する時、「推量・推測」用法と関連付けて論じるのは普通である (奥田 1984、田野村 1990、安達 1999、宮崎 2005 など)。階層性の問題で各モダリティ形式をどの階層に入れるべきかを考える時も、推量・推測用法の分析との一致性を考慮しなければならない。

- (14) a. 最近物忘れがひどくなってきたなあ。
- b. お忙しいからなんじゃない¹²↘/お忙しいからなんでしょう↘
??お忙しいからなんでしょう↗/??お忙しいからなんでしょうね↗
- (15) a. 最近老忘事。
- b. 太忙了吧↘/是不是太忙了↘

a の回答を要求しない b の言葉として自然なのは推量・推測用法で使われる形式で、形式は明らかに判断レベルのものである。

以上の議論を踏まえて、イントネーションを入れて、各モダリティ形式を図2に当てはめると次のようになる¹³。



¹² 上昇調の「のではないか」は推測用法なのか、確認要求用法なのかについての議論はしないことにする。但し、上昇調も使えることから、「推量確認要求」用法として使われる「のではないか」も推測の意味が強く出ていることが伺える。

¹³ 会話における推量・推測用法は「述べ立て」(仁田 1991) という伝達レベルのものがあると考え、「↘」で示す。

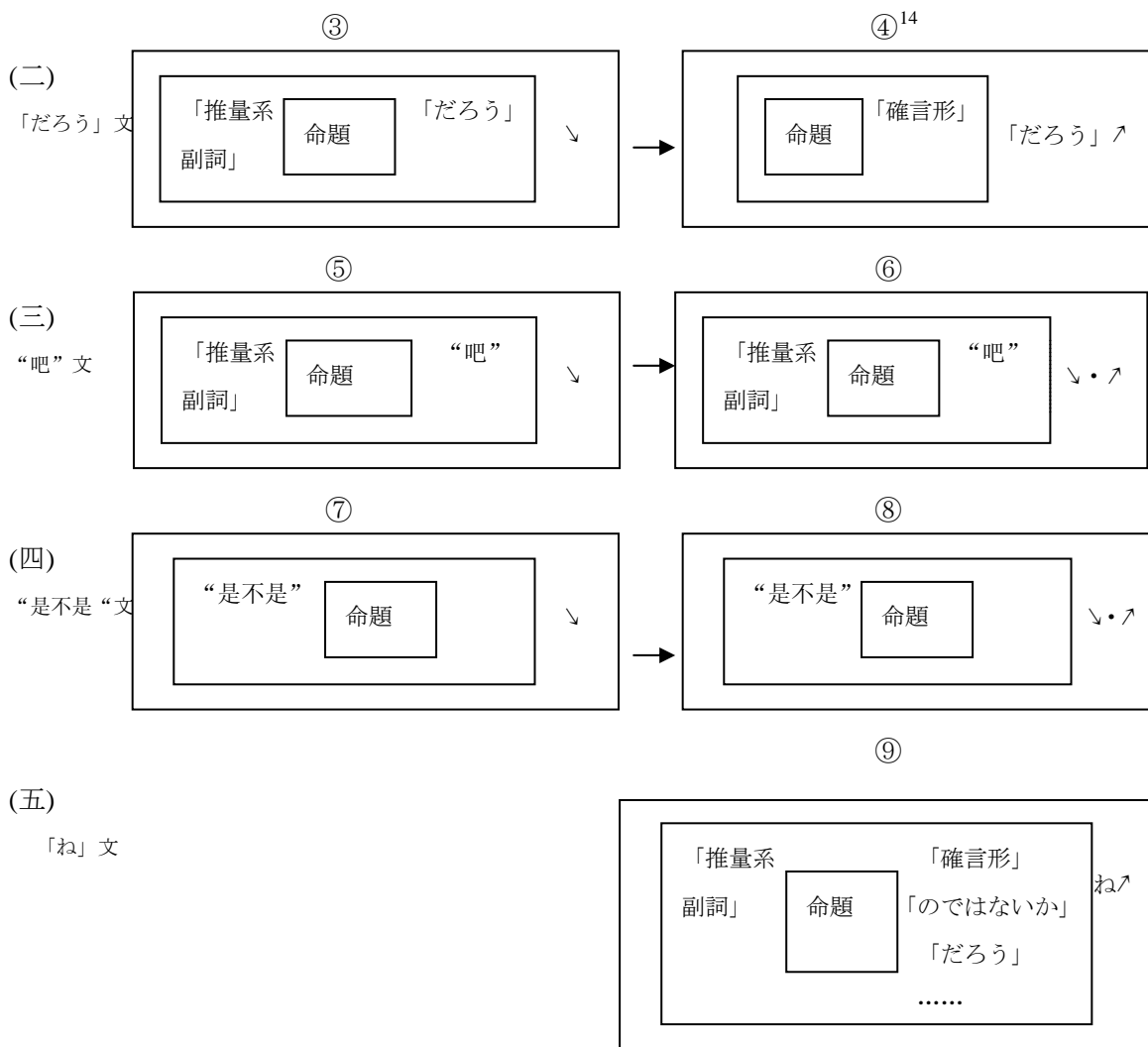


図3 各表現形式の意味的階層構造

図3からわかるように、日本語の「推量確認要求」用法においては、

- 1) 「のではないかと」という表現形式は判断レベルのもので、「だろう」と「ね」は伝達レベルのものである；
- 2) 上昇調 (↑) は必須の要素で、「推量確認要求」用法の共通伝達標記である；
- 3) 日本語は伝達要素が豊かで、聞き手への伝達を重視する「聞き手中心型」と言える。

¹⁴ 「推量」と「確認要求」がそれぞれ別の表現形式によって表されていることを考えると、「だろう」と「ね」に「推量確認要求」用法を持つと認定するのに問題があると思われる。しかし、「だろう」の判断形式への選択と「確言形」がつく「だろう」文や「ね」文には無標の「確言形」の文と違って、「推測・推量」に限定されるなどのことを考慮して、「だろう」と「ね」には「推量確認要求」用法があるとした。厳密的には「だろう」文と「ね」文としなければならないかもしれない。なお、④における「確言形」には、「のだ」という形式も入っている。

一方、中国語の「推量確認要求」用法においては、

- 1) “吧”も“是不是”も判断レベルのものである；
- 2) 伝達レベルのもので、下降調 (↘) と上昇調 (↗) がある；
- 3) 推測用法と区別がつかない形式も使用されることから、中国語は話し手の事態への判断を重視する「話し手中心型」と言える。

ここで、2節で問題となった推量系副詞と「だろう」の非共起は、「だろう」のレベル移行によるものと考えられる。それに対して、レベル移行のない「のではないか」は「推量確認要求」用法においても、推量系副詞と共起できる。また、「ね」文に関して言えば、専用の伝達要素として働く「ね」の内側に「のではないか」・「だろう」などの要素が納まり、対照研究の立場から見て独特な表現方法を成している。

4 語用論的な制限から見る各表現形式の使用状況

「のではないか」は判断レベルのもので、話し手の推測が全面的に出ている。聞き手領域の情報に関してどこまで推測できるかが問題である。

「のではないか」の使用制限に関しては、鈴木 (1989、1997) の「聞き手の私的領域と丁寧表現」という理論を参考にして、確認する情報にも私的領域が関わり、「情報の質」によって「のではないか」の使用制限が変わると考える。鈴木の研究では、日本語において、発話の丁寧さには見かけの丁寧さ (スタイル・語彙の選択、敬語など) と本質的な丁寧さ (「聞き手の私的領域」に踏み込まない配慮) があり、「聞き手の私的領域」への配慮はまた親疎関係と密接な関係があると指摘している。鈴木 (1997) で挙げた「聞き手の私的領域」に属するものには、「欲求・願望・意志・感情・感覚」等があり、周辺的に聞き手の行動・家族等も入っている。

判断レベルに属する「のではないか」の確認要求用法は派生的なもので、聞き手領域の情報について話し手がどこまで推測できるかは、聞き手との親疎関係・推測する情報の質と関係があると考えられる。

まず、聞き手と親しい関係にある場合、例えば、

(16) 「お姉ちゃん、会いたいんじゃない。今井さんと、すごく」 (三宅 1996: 115)

においては、願望という「聞き手の私的領域」に対する配慮がいらぬと同じように、「のではないか」でもって、推測し確認することも許される。

しかし、親疎関係で「聞き手の私的領域」への配慮が必要となる場合、「情報の質」から見れば、私的領域指数が高ければ高いほど、「のではないか」にかかる使用制限が強くなる

と考えられる¹⁵。「情報の質」にいろいろなものがあり、その代表的なものを階層的に列挙し、「のではないか」の使用制限との関係を図で捉えると、図4のようになる。

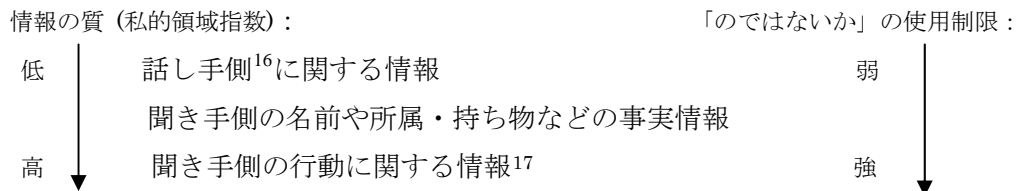


図4 情報の質と使用制限の相関関係

例えば、同じく「あまり親しくない目上の先生に対して」という状況設定において、「情報の質」が違うと、文の適切性も違ってくる。

- (17) 先生、私、ノイローゼにかかっているのではありませんか。(例えば、先生が精神科医である場合)
- (18) 田中先生ではありませんか。(例えば、空港で迎えに行っている学生が田中先生らしき方を見て尋ねていく場合)
- (19)? (学会には)先生もいらっしゃったのではありませんか。(例えば、学生が指導教官に尋ねる場合)
- (20)? (学会には)先生もいらっしゃるのではありませんか。(同上)

続いて、「だろう」と「ね」を比較しながら簡単に考察する。2節と3節で見えてきたように、「だろう」形式自体は伝達レベルに属するが、推量系副詞と共起しない¹⁸だけでなく、内側には常に「確言形」が伴う。「だろう」文は常に話し手の高確信度の推量が入っている(決め付け度が高い)¹⁹。それを目上の人やあまり親しくない人に対して使うと、自分の判断を押し付けるという不躰な印象を与えてしまい、丁寧さに欠けるのである。それに対して、「ね」は、情報に関して話し手が聞き手に同一の認知状況をもつことを積極的に求める(協

¹⁵ 実際の言語使用において、親疎関係と「情報の質」が絡み合ってもっと複雑な様相を呈すると思われるが、その相関関係については、今後、アンケートや統計などを通してさらに綿密に調べる必要がある。

¹⁶ 「話し手」や「聞き手」ではなくて「話し手側」と「聞き手側」としたのは、それぞれのなわ張りに属する家族や友人などの情報に関しても、図4の階層性があると考えられるからである。

¹⁷ 聞き手の行動に関する情報の内部には、またいろいろ詳しく分けなければならないが、今後の課題とする。

¹⁸ 「宝くじを買っておいたら、もしかしてあなたも当たるかもしれないでしょう。」というような文においては、「もしかして…かもしれない」という蓋然性表現形式が「だろう」の前に来ているが、こういう場合、もはや、「宝くじは誰でも当たる可能性がある」という共通認識への確認であって、本稿でいう「推量確認要求」ではない。また、「きっとお疲れでしょう。」のような文は推量用法とする(金水 1992)。

¹⁹ 安達 (1999) では、確認要求の「だろう」が目上の人に対して使うと不躰な印象を与える原因は「だろう」の表出的性格によると考えている。本稿も基本的にその立場に同意する。表出性をわかりやすく言えば、ここでは話し手が聞き手に関することを決め付けるニュアンスのことだと思われる。

応的な態度)を示す標識で(神尾 1990: 77)、「だろう」より丁寧に受け止められる。

例えば、遊園地の切符売場でまだ何も言っていない大人一人と子供一人を前に、切符販売員の発言として

(21) ?大人一枚と子供一枚でしょう↗

(22) 大人一枚と子供一枚ですね↗

(21) より (22) のほうがより丁寧である²⁰。

また、「だろう」・「のではないか」という表現形式があるにもかかわらず、その二つの表現形式を判断レベル(つまり推量・推測)にとどまらせて、「ね」をつけるということも、より丁寧な表現にしたいという話し手の動機付けがあると考えられる。

(23) 疲れたでしょう↗

(24) 疲れたでしょうね↗

このように、日本語においては「情報の私的領域」・「決め付け度」といった「丁寧さ」に関わる語用論的な要素が働いているのである。それに対して、中国語の“吧”と“是不是”に関しては、日本語に見られた語用論的制限はほとんどかからない。

(25) 老师, 您也去的吧? / 老师, 您是不是也去? ((20) の訳文)

(26) 是一张大人, 一张小孩吧? / 是不是一张大人, 一张小孩? ²¹ ((21)(22) の訳文)

要するに、意味的(情報伝達)階層構造の分析から得た「聞き手中心型」の「日本語像」と「話し手中心型」の「中国語像」は語用論的にもはっきりと描き出された。つまり、日本語が確認の内容や相手との関係など様々な要素に気を配りながら各表現形式を使い分けるのに対して、中国語は基本的に確認内容や確認の相手に応じて表現形式を変えることがないのである。

5 まとめと今後の課題

「推量確認要求」用法において、日本語と中国語は次のような違いが見られた。

- 日本語：聞き手への伝達を中心とする「聞き手中心型」；
確認する内容と確認の相手によって表現形式を使い分ける。

²⁰ 親しい友達同士の場合、「行くでしょう」は「行きますね」より丁寧に聞こえるというインフォーマントの意見もある。そういう場合、プライトネスの理論とも絡み合うので、更なる検討は今後の課題とする。

²¹ “吧”と“是不是”の使い分けについては、紙幅の関係で、別の機会に譲る。

- 中国語：話し手の推測を中心とする「話し手中心型」；
基本的に確認の内容や相手によって表現形式を変えることがない。

「よく言えば気配り、悪く言えば対人恐怖症的な「日本語」像と、よく言えば自立的、悪く言えば一方的な「中国語」像」(木村・森山 1992: 38) は、「推量確認要求」においても、はっきりと描き出された。

聞き手領域の情報に関して、推測しながら聞き手に確かめていくという情報伝達過程においては、日中両語の仕組みが違っているのである。その仕組みの違いが多様な対応関係を生み出した原因だと考えられる。

つまり、日本語を中国語に訳す場合、原文に推量系副詞があると、“是不是”より、副詞と共起できる“吧”が選択されやすい；中国語を日本語に訳す場合、副詞のことだけでなく、確認する内容や確認の相手などの語用論的な要素を考えながら、表現形式を選んでいくという作業が必要となってくる。それで、対訳で、六つの対応関係が見られたのではなからうか。

「推量確認要求」用法を持つ中国語の付加疑問文の位置づけや「あなたも行くよね」のような「よね」文との関連性を今後の課題とする。

(27) “晓燕，你大概听了什么人的挑拨了，是不是／是吧？”

資料

- ① 「中日対訳語料庫」 北京日本学研究中心 2002-2003
- ② 新潮文庫 100 冊 CD-ROM

参考文献

- 安達太郎 (1999) 『日本語研究叢書 11 日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版。
- 奥田靖雄 (1984) 「おしはかり(一)」 『日本語学』 3-12: 54-69, 明治書院。
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』 大修館書店。
- 神尾昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』 大修館書店。
- 木村英樹・森山卓郎 (1992) 「聞き手情報配慮と文末形式—日中両語を対照して—」 『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』 3-43, くろしお出版。
- 金水敏 (1992) 「談話管理理論からみた「だろう」」 『神戸大学文学部紀要』 19: 41-59。
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) —対話資料による分析—』 秀英出版。
- 呉紅哲 (2002) 「「ダロウ」と「吧 (ba)」の確認要求用法の比較」 『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』 第 13 号: 69-81。
- 鈴木睦 (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現」 『日本語学』 8-2: 58-67。
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」 田窪行則 (編) 『視点と言語行動』

45-76,くろしお出版.

- 曹大峰 (2000) 「認識モダリティの日中対照例—「だろう」と「吧 (ba)」—」『認識のモダリティとその周辺—日本語・英語・中国語の場合—』 101-111,国立国語研究所.
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』 152: 123-109,国語学会.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法』 和泉書院.
- 鄭相哲 (1992) 「いわゆる確認要求の「ネ」と「ダロウ」—情報伝達論的な観点から—」『日本学報』 11 号: 105-120.
- 張惠芳 (2008) 「「推量確認要求」用法の日中対照研究—情報伝達・語用論的な観点から—」『言語記述と言語教育の相互活性化のための日本語・中国語・韓国語対照研究』 日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) (平成 16 年～平成 19 年度) 研究成果報告書 (研究代表者: 沼田善子) 116-138.
- 張興 (2006) 「「のではないか」と“是不是”の対照研究」『日中言語対照研究論集』 8 号: 108-121.
- 張根壽 (2004) 『話し手の認識的態度を表す副詞の研究』 筑波大学博士論文.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『モダリティ』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版.
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』 89: 111-122, 日本語教育学会.
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』 ひつじ書房.
- 森山卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』 101: 64-83.
- 森山卓郎 (1999) 「モダリティとイントネーション」『言語』 28 卷 6 号: 74-79.
- 李宇明 (1997) 〈疑問标记の复用及标记功能的衰变〉《中国语文》第 2 期: 97-103.
- 陆俭明 (1984) 〈现代汉语里的疑问语气词〉《中国语文》第 5 期: 330-337.
- 邵敬敏 (1996) 《现代汉语疑问句研究》 东北师范大学出版社.
- 邵敬敏・朱彦 (2005) 〈“是不是 VP” 问句的肯定性倾向及其类型学意义〉《世界汉语教学》第 3 期: 265-285.
- 張惠芳 (2004) 〈关于日语推测语气表达形式“のではないか”的考察〉《日语学习与研究》第 2 期: 15-21.
- 張惠芳 (2008) (印刷中) 〈关于日语“推量要求确认”表达形式「だろう」、「のではないか」、「ね」考察—从信息传达和语用学角度—〉《日语研究》 商务印书馆.

付記

本稿は、日本中国語学会第 2 回関東支部拡大例会 (2008 年 3 月 22 日、於中央大学) における発表内容をもとに加筆、修正したものである。席上、有益なご指摘を下された方々に感謝申し上げます。

(張 惠芳 筑波大学大学院生 zhanghuifang72@yahoo.co.jp)

A Contrastive Study of the Japanese and Chinese Languages in the Usage of Inference Request Confirmation: From the perspectives of information transmission and pragmatics

ZHANG Huifang

In bilingual interpretation, there exists 6 (3×2) corresponding relations between Darou, Nodehanaika and Ne, forms of expression in the Japanese language and the Chinese expressions of Ba and Shibushi used for inference request confirmation. This paper focuses on the three aspects of concurrence restrictions between forms of expression and modal adverbs, different positions of various modal forms of expression in the information transmission structure (proposition, judgment and transmission), and pragmatic constraints of forms of expression, with a view to proving that Japanese expressions of inference request confirmation are organized in a different way than their Chinese counterparts. As an hearer-oriented language focusing on communicating meanings to the hearer, the Japanese language uses different forms of expression according to specified contents and hearers. The Chinese language, on the other hand, is speaker-oriented that centers upon the speaker's inference, therefore its forms of expression are not subject to the influence of specified contents and hearers. This paper argues that differences in organizational forms are what give rise to a number of corresponding relations.